

いちごに発生したヒラズハナアザミウマに対する主要薬剤の殺虫効果

令和8（2026）年6月18日

栃木県農業総合研究センター

1 目的

いちごで発生するヒラズハナアザミウマに対する主要薬剤の殺虫効果について検定を行い、今後の防除の資とする。

2 材料

(1) 供試虫

採集地と採集時期は表1に示した。採集したヒラズハナアザミウマはソラマメの催芽種子を餌として、25℃、16L8Dで累代飼育した。

(2) 供試薬剤

供試薬剤は表2に示した。薬剤は規定の濃度に希釈し、展着剤としてポリアルキレングリコールアルキルエーテル（商品名：マイリノー）を最終濃度10,000倍となるように加えた。登録されている希釈倍率に幅がある場合は、濃度が最も高くなる倍率で検定した。対照区は、展着剤のみを加えた蒸留水を用いた。

3 検定方法

検定はインゲンマメ葉片浸漬法により行った。検定容器（商品名：バイアルSCC（容量10ml））に薬液を十分量注入した後に薬液を除去し、ペーパータオル上で開口部を下にして内面に付着した薬液を乾かした。薬液を風乾した後、容器内にろ紙片を一枚入れた。インゲンマメの初生葉から葉を切り取り、葉片（1.1cm×1.1cm）を作成した。葉片を薬液に10秒以上浸漬し風乾した後に、容器内に入れた。容器内にヒラズハナアザミウマ雌成虫を10～11個体放飼した。容器は25℃、16L8Dの人工気象室内に静置し、48時間後に生存個体数を計数した。補正死虫率はAbottの補正式（補正死虫率（%）＝{（対照生存虫率－処理生存虫率）/対照生存虫率}×100）で算出した。検定は1薬剤につき3反復行った。

なお、シアントラニリプロール水和剤は遅効性の薬剤であるため、試験開始72時間後の生存個体数を計数した。

殺虫効果試験における補正死虫率は、90%以上を高い、70～90%をやや高い、50～70%をやや低い、50%以下を低いと評価した。

4 結果

結果は表3に示した。

- ①アセタミプリド水溶剤の補正死虫率は、一部の地点でやや高かったが、多くの地点でやや低い、または低かった。
- ②スピノサド水和剤の補正死虫率は、多くの地点で高かったが、1地点で低かった。
- ③スピネトラム水和剤の補正死虫率は、多くの地点で高かったが、1地点で低かった。
- ④トルフェンピラド水和剤の補正死虫率は、すべての地点で低かった。
- ⑤シアントラニリプロール水和剤の補正死虫率は、すべての地点で低かった。
- ⑥フロメトキン水和剤の補正死虫率は、すべての地点で低かった。

表1 供試したヒラズハナ
アザミウマの採集時期

採集地	採集年月
足利市	2025.4
鹿沼市	2025.4
小山市	2025.4
上三川町	2025.4
真岡市	2025.4

表2 供試した薬剤と試験濃度

薬剤名	商品名	IRAC	系統名	供試濃度	殺虫効果
アセタミプリド水溶剤	モスピラン顆粒水溶剤	4 A	ネオニコチノイド系	2000倍	接触毒・食毒・速効性
スピノサド水和剤	スピノエース顆粒水和剤	5	スピノシン系	5000倍	食毒・速効性
スピネトラム水和剤	ディアナSC	5	スピノシン系	2500倍	食毒・速効性
トルフェンピラド水和剤	ハチハチフロアブル	21A	METI剤	1000倍	接触毒・速効性
シアントラニリプロール水和剤	ベネビアOD	28	ジアミド系	2000倍	食毒・遅効性
フロメトキン水和剤	ファインセーブフロアブル	34	フロメトキン	1000倍	接触毒・食毒・速効性

※ 各薬剤には展着剤マイリノー（10000倍）を加用した。

表3 いちごのヒラズハナアザミウマ雌成虫に対する供試薬剤の
48時間後の殺虫効果（補正死虫率％）

薬剤名	足利市	鹿沼市	小山市	上三川町	真岡市
アセタミプリド水溶剤	68	46	75	10	52
スピノサド水和剤	100	100	100	15	100
スピネトラム水和剤	100	90	100	24	100
トルフェンピラド水和剤	0	0	20	7	23
フロメトキン水和剤	0	0	0	3	3
無処理区生存虫率	97	93	100	97	100

※ 各試験区の供試虫数は29~33匹とした。

表4 いちごのヒラズハナアザミウマ雌成虫に対するシアントラニリプロール水和剤の
72時間後の殺虫効果（補正死虫率％）

薬剤名	足利市	鹿沼市	小山市	上三川町	真岡市
シアントラニリプロール水和剤	0	15	0	7	3
無処理区生存虫率	75	90	91	93	97

※ 各試験区の供試虫数は29~33匹とした。